

様式(細則 5-2)

平成 23 年 2 月 8 日

浜田市議会議長 牛 尾 博 美 様

議員名 平 石 誠



調 査 研 究 活 動 報 告 書

下記のとおり調査研究のため視察等を行ったので、その結果を報告します。

記

1. 期 間 平成 23 年 1 月 24 日 ～ 1 月 26 日
2. 視察又は訪問先
熊本県荒尾市、宮崎県西臼杵郡五ヶ瀬町
3. 調査経費 円 30,599 円
4. 調査研究活動の概要
別紙のとおり



調査研究活動報告

1. 熊本県荒尾市

有明海を望む県の北部に位置し、北隣りの太宰田市とともに炭坑を核として石炭の町として発展してきたが、閉山とともに関連産業が衰退して現在に至る。

①調査研究事項

※「2030年あらお有明優都戦略」

○産業再生・創出プロジェクトについて

- *産業団地及び工業団地への企業誘致を積極的に推進し成果をあげている。
- *「チャレンジプラザあらお」の取り組みでは、新規操業予定者や操業間もない企業に対して事業スペースの提供とともに経営相談や技術相談の支援を継続的に実施し、すでに何社かが卒業し効果をあげている。
- *「荒尾市地域再生雇用創出協議会」を設立して厚労省委託事業「地域雇用創造推進事業」を受託し、人材育成や就職促進事業を講座・セミナー無料で実施している。

○地域元気づくり推進プロジェクトについて

- *多くの住民参加のもとでまちづくりを推進するとして小学校単位に「地域元気づくり委員会」を設立、原則5年間の事業実施の支援を実施している。
- *推進体制については担当窓口を「くらしいきいき課」とし、地元在住職員も将来目標に向けての活動に積極的に参画している。
- *当面5年間としつつも活動の継続に向けて、更なるステップアップ事業の推進支援を実施し協働のまちづくりの定着化を目指している。

○観光交流拡大プロジェクトについて

- *わかり易さをモットーに子どもからお年寄りまでに幅広くPR出来る観光パンフレットを「作戦会議」で作成し、細かいニーズへ対応出来るサービスを目指している。
- *観光ルート開発に向けた事業推進の更なる進展を常に目指している。
- *市内の朝市や産直店舗の共同出店による「合同朝市」を開催し、交流人口の増大を図っている。

まとめ

先ず注目したのは、まちづくりを戦略として取り組む意気込みであった。この戦略は平成18年にスタートし平成43年までの25年間の超長期で「元気なあらお」を目指すもので、事業効果での目標では数値を取り入れて積極的に推進されている様子が伺えた。又、その推進における各プロジェクトが連動しており、市民力を軸にして、その力を最大限活用し協働でのまちづくりに向けて行政は各プロジェクトの住民活動を事務局としてしっかりサポー

トしており、このことが重要であり、住民と行政職員が協働して推進することにより双方に意識改革が進み同じスタンスで推進できていると感じた。長期に渡る計画であり、それを戦略として推進する過程において状況変化に応じた見直しは適時実施するとのことであった。住民と行政の協働により組織的活動が連動している様子が伺えたがこの活動を推進していく意識の継続こそが今後のポイントではないかと感じた。

2.宮崎県五ヶ瀬町

九州で唯一の天然スキー場のある五ヶ瀬町は県都宮崎市から県内で一番遠い場所で冷涼な気候の人口約4,500の町である。

①調査研究事項

※五ヶ瀬町の教育

○「G教育」について

*Gは五ヶ瀬町の頭文字で、小規模校の利点を生かして授業方法を変えるシステムで、平成19年に教育ビジョンを発表して「学校づくり委員会」・「町づくり委員会」・「学校システム委員会」を設置。住民、行政、教職員から委員を公募し活動を展開している。

*最適人数による授業は、教える内容によって最も効果の見込まれる学習集団で授業を行なうとし、多人数指導と小人数授業の組み合わせで小規模校の課題解消を図っている。

*授業形態を分類し授業内容で組み合わせるA型(2学年)・B型(単学年)・C型(小中連携)とI型(習得)・II型(活用)・III型(探求)、学習集団の大きさとL型(大人数)・H型(中人数)・S型(小人数)を組み合わせ実施。

○「協調学習」について

*新しい学びのプロジェクトであって、教師が教えることをやめて子ども達の受け身のスタイルからの脱皮を目指すもので、子ども一人一人が資料をもとに読んで学んで教えあう方法。

*子ども達を班別編成として、一つのテーマに対して観点の違う資料を配布して知識を学ばせた後班を組み替えてそれぞれに違う班から持ち寄った知識を集めて答を出すやり方。

まとめ

サッカーは11人对11人でやってサッカーであって、小人数だからと6人对6人でやるのはサッカーではない。サッカーの出来る工夫が必要であり、教える内容毎に最適人数に変える、これがG教育であって何も出来ないことは無い、といった教育長の熱い思いのこもった言葉が強く印象に残った。小規模校は「社会性・競争心」に劣ると言った固定観念は間違いであって、多

様な授業形態の組み合わせで学力面においても数年の間に県内トップクラスにまで成果をあげていた。学校を地域のコミュニティの核とした取り組みとしての「時間通貨」の取り組みに新鮮さを感じるとともに、学校給食を地域の老人に「ふれあい給食サービス」として子どもとともに食べる取り組みや、町内に図書館がないことから「ごかせふれあいライブラリー」を始めていつでもどこでも本が借りられるシステムなど小さい町にあつて工夫がされていた。「地域を知らない教員には教育はできない」このことも徹底されて取り組まれており、ことなかれ主義の学校が教育長の信念と熱意で大きく変化してきている様子が十分に伺えた。

以上 資料を添えて報告いたします。